

所謂“主語的二重性”について

内 藤 正 子

I

中国語における主語の問題は、今までさまざまな観点から論じられて来た。中でも、1955年から56年にかけての『語文学习』誌上での討論に見られるように、賓語との関係から取り上げられることが多かったのは、大雑把な比較ではあるが、日本語における主語が、むしろ述語と対応させて論じられて来たのを考えると、興味深い現象に思われる。いずれにせよ、大変基本的な、故に又やっかいな問題であることには変わりがない。

さて、こうした中で1985年第1期の『中国語文』に発表された李臨定氏の「主語的語法地位」と題する論文は、中国語の主語の“有定”“无定”の問題等も含めて、最近の語法研究の成果を織り込みながら主語の問題を扱っている点で注目される。結論だけを一口で言ってしまうと、中国語における主語という概念は語法上それほど重要であるとは言えない、むしろ“施事”“受事”といった名詞と述語動詞との関係を分析することが重要であるということなのだ、この論文の大きな特徴は、呂叔湘氏の“主語的二重性”の観点を主な拠所としていること、又それに関連して主語と賓語の問題をレベルの概念で区別していることにあると言えるだろう。この“主語的二重性”とは、呂叔湘氏が「汉语語法分析问题」(1979)の中で明らかにした考え方であるが、中国語の主語を考える上で生ずる、或いは生じて来た重要な問題を含んでいるように思われるので、私はこれをもう一度捉え直すことをしてみようと思う。併せてその位置づけについても考えながら、中国語における主語、或いは賓語を考える場合の、いわば方法論の問題を取り上げてみたい。⁽¹⁾

II

まず、誤解を避ける為に、「汉语语法分析问题」の中から、はっきり“二重性”という言葉を使って表わされている部分を抜粋してみよう。

1. 主語和賓語不是互相對待的兩種成分。主語是對謂語而言，賓語是對動詞而言。主語是就句子格局說，賓語是就事物和動作的關係說。主語和賓語的位置不在一個平面上，也可以說是不在一根軸上，自然不能成為對立的东西。……似乎不妨說，主語只是動詞的幾個賓語之中提出來放在主題位置上的一个。好比一个委員會里幾個委員各有職務，開會的時候可以輪流當主席，不過當主席的次數有人多有人少，有人老輪不上罷了。可以說，凡是動詞謂語句里的主語都具有這樣的二重性。(p. 73 傍點は筆者。以下同様)
2. 到了不及物動詞做謂語，已經可以有兩種看法：或者以主語為基點，謂語是加于主語的說明，或者以謂語動詞為基點，主語名詞代表體現動作的事物。但是不及物動詞做謂語的句子，跟名詞、形容詞謂語句一樣，還是‘二項式’，到了及物動詞做謂語的主體，就成了‘多項式’，動作所賴以體現的事物就不是一個而是兩個甚至三個，也就是說有了兩個或三個主要的補語了。但是主語只能有一個，或者代表這一個事物，或者代表那一個事物。這時候主語的二重性就更加明顯了。(p. 108)
3. 讓賓語跟主語相對，正如更早的止詞跟起詞相對，都是着眼于名詞跟動詞的關係，即事物跟動作的關係。這樣就出現了主語的二重性：一方面是主和謂直接相對，是說明和被說明的關係，一方面是主和賓圍繞動詞相對，是施動和受動的關係。(p. 107~108)

1, 2, 3 と分けたのは、同じ“主語的二重性”と言っても、その意味する所が、微妙に異なるように思われるからである。

1 は動詞のいくつかの賓語が文の中で、主題の位置に来て主語となる、つまり主題の位置としての主語ということ。2 は一つの文の中で動作の表現される

拠所となる事物はいくつあるかという観点から、二項式と多項式に分け、これに対し、主語はあくまでも一つしかあり得ないということ。3は一方では主と述が直接相対し、一方では主と賓が動詞を巡って相対するという。この三つの観点はそれぞれ深い関連を持っではいるが、全く同一の問題として扱うことはできないものである。

例えば、3の部分に関しては、既に「从主語賓語的分別談国語句子的分析」（1946）の中で表わされているものである。それは、

从主語謂語兩分法的立場來看，賓語只是謂語的一部分，不能和主語相提并論。如果取動詞中心觀（動句里可以這樣看），賓語和主語是對立的，都是限制動詞的。

（「汉语語法論文集」1955所収）

と述べられているのだが、これに基いて朱昌氏は呂叔湘氏自身が示した観点とは又異なる二つの主語に対する観点を示している。

一種認為主語是對謂語而言的，一種認為主語是對動詞而言的。由此可以得出這樣的結論：按照前者的看法，應該把句子分為兩大部分，主語是被述的部分，也即主語是陳述的對象，謂語是對對象的陳述。按照後者的看法，認為主語是對動詞而言，不是對整個謂語部分而言，應當根據實體詞與動詞的選擇關係來確定句中的主語和謂語。⁽²⁾

これは、主―述と主―動という二つの観点であるから、厳密に言えば、先ほどの三つの観点とは又別の捉え方が導き出されることになる。更に、この3の部分については、李臨定氏も指摘しているように、「文法要略」にまで溯ることができるのだが、⁽³⁾ 既に、動詞に対する施受関係を巡って主と賓が対立するとは言えないということが明らかになっている以上、ここで言う二重性の意義は、主・述という観点と、施事・受事という観点は全く別のもの、必然的關係なしということを改めて言っているに過ぎないと思われるので、この点については取り上げないことにする。

ここで提起したいのは、1の部分に関する問題である。ここでは、主語と賓語は同一の平面にないということが言われている。つまり主語は述語に対して言う、賓語は動詞に対して言う、主語は文の組み立てについて言う、賓語は事

物と動作の関係について言うということである。

このように、主語と賓語を次元を分けて論ずる、つまりレベルの概念を使っ
てはっきり分けるという考え方の背景には、既に述べたように、施事・受事関
係と主語・賓語という関係が相対するものではない、言い換えれば、中国語に
おいては、主語が動作の主体を表わし、賓語は客体を表わすというような理論
が成立しないということが明らかになって来たということがあり、では主語と
賓語は同じレベルで考えられるものなのかという疑問に対して、実はこの二つ
も次元を分けて論ずべきものなのだという考え方が出て来たものと言えよう。

このことは、かつての主賓論争では、例えば呂冀平氏の「主語和賓語的問
題」(1955)⁽⁴⁾に見られるように、主語・動詞・賓語の三つをレベル別にせず対
比させ、三者の間の抽象的な関係・規律を発見しようとし、結局、意味と構造
を結びつけて分析することが良いと結論する以外になかったのを考えると、確
かに今までには見られなかったものと言えるであろう。

このことは又、分析法との関連で考えてみると、所謂伝統的分析法である文
成分分析法(句子成分分析法)に対して、段階分析法(層次分析法)が論じられ
るようになって来たという現象と深い繋がりを持っていることがわかる。

つまり、文の成分を表わす場合に、文成分分析法では、

他 || 找到了 需要的 参考书。⁽⁵⁾

主 || 谓 — 定 — 宾

というように、文の構造を段階的に明らかにして行くという方法をとらずに、
恰も一つの平面上で結びついているかのように分析するということに対して、

他 找到了 需要的 参考书。

| | |

| | | | |

| | | | |

このように、文の重層性、一層一層と段階的に成立して行く過程を明らかに
すべきだとして、段階分析法が取り上げられて来たということである。

文成分分析法と段階分析法の二つの分析法を巡っては、1981年から82年にか
けて、「中国語文」誌上で、かつての品詞論争や主賓論争を思い起こさせるよ

うな論議が交わされたことは記憶に新しい。この論議の中でも、主語と賓語は同一の平面にないという観点が、しばしば引用され、論拠とされた。

例えば、沈开木氏は、文成分分析法における主要成分と連帯成分との関係について、これらは文の成分どうしの関係ではないということを言っている。つまり主要成分（沈氏はこれに主語と述語のみを入れる）は文の成分であるが、連帯成分（定語・状語・賓語・補語）は文の成分とは言えない、只詞類と関係が発生するのみということの論拠として挙げている。⁽⁶⁾

又、史锡尧氏は、文成分分析法が

我们一定会建设一个具有现代工业、现代国防和现代科学文化的社会主义国家。

のように、主語・述語・賓語を基本成分（主干）として同時に捜し出してしまふことに反対し、主述文をまず主と述に二分する、これが第一層で、更に述語を分析した時にやっと賓語が出て来るのであって、これは第二層であると言う。その根拠として、呂叔湘氏の主語と賓語の平面は同じではないという指摘を引いている。⁽⁷⁾

しかし、このように「主語と賓語は同一の平面にはない」或いは「賓語は動詞に対して言う」ということを考えるのであれば、主語や賓語を、単位の認定や設定或いは定義の問題としてもう一度捉え直し、明確にしなければ意味がないように思われる。それは、主語・述語は文の直接成分であると同時に、主語・述語・賓語いずれの下位成分としても現われるということの一つ例にとっても明らかである。現段階ではこうした問題、つまり主語や賓語の定義づけに対する答えが満足すべき状態にないとは言うまでもない。

むしろ、これは客体界における動作や状態と事物との間に認められる関係について言えるのではないだろうか。語彙素の層に対する意義素の層、或いは格のレベル、更に広く表層構造に対する深層構造といったレベルにおける関係のように思われる。つまり、目的格の方が主格よりも先に関係を構成するという意味で両者は同一のレベルにはなく、又こういう意味で、文の構成を重層的なものとして捉えることが必要になってくるわけである。⁽⁸⁾ 従って、意味構造を正確に反映しているとは言えない IC 分析のような構造分析とは、本来直接かわるものではないし、格のレベルにおける重層性をそのまま表層の文の構造

分析に持ち込むことはできない。文の構造分析を語彙素のレベルにおける分析と意義素のレベルにおける分析に分けて見れば、⁽⁹⁾ 名詞—動詞—形容詞と分析して行くのと同じように、主語—述語—賓語を同一のレベルで扱うことも必ずしも不合理なことではないはずである。何故なら、どちらも linear の配列に基いた語彙素のレベルにおける分析だからである。

さて、このように、主語と賓語は同一の平面にないということは、実は客体界における動作や事物との関係に則して考えられなければならない観点であるとする、文の成分を主題—説明というように分けること、つまり題述関係を認定することとも又別の問題だということになる。題述関係が顕著であると言われる日本語において、topic marker 「は」は格を決定しないということからも、それは明らかである。

従って、李臨定氏が最後の所で（「主語的語法地位」）、

(46) 我已经知道这件事了

(47) 我这件事已经知道了

(48) 这件事我已经知道了

の三つの例文について、

これらの“这件事”は動詞との関係では“一家人”であるから、これを賓語とするにせよ、小主語や大主語とするにせよ、全く違った成分に分けるのは適当ではないとし、主語の二重性の観点をを用いて、一方では(48)の“这件事”を主語（話題）と分析し、一方では(46)(47)(48)の“这件事”を“一家人”であると認めるとしているが、これはやはり、表層構造に属する特徴である主語・述語或いは賓語という概念と、動詞との関係で捉える施事・受事概念と、更に題述関係という又別の概念を区別した上で論ずべき問題のように思われる。

更に、レベルの問題を別にしても、中国語においてはどれが基本的表現か⁽¹⁰⁾ということを中心として展開させて行く方が、少なくとも我々外国人にとっては、中国語を理解する上で一つの有力な手掛りになると思われるのである。

III

主語の二重性に関連してレベルの概念という問題が出て来たが、次に、中国語における文法研究の上でそれがどのように表わされているか、用語の点から

少し触れてみよう。

イギリスの R. R. K. Hartmann と F. C. Stork の編集による「DICTIONARY OF LANGUAGE AND LINGUISTICS」(1972) を訳した「语言与语言学词典」(1981上海) は、“level” の訳として、a. “级” “平面” “层次”，b. “谈话方式”，c. “音量” “响度” を挙げている。この中、ここで問題としているのは a の意味での level であるが、この“级” “平面” “层次” といった用語も、実際の文法書を見てみると、明確な使い分けがされているわけではなく、むしろ渾然としているような観がある。

例えば“级” という語について見てみると、よく見られるのは、

汉语的语言单位有五级：语素、词、词组、句子、句群。各级单位依靠语序和虚词由小到大层层组合起来。

田小琳「语言单位组合中的层次」^[1]

や、或いは又

句法级的层次是可以升降的。如果词充当句子成分的叫升级，也可以看成是短语的变形；如果句子充当句子成分的叫降级，也可以看作是短语的变形。

卞觉非「汉语语法分析方法初议」^[2]

といった、语音、词法、句法等の単位を分けるものであるが、この他に、文の成分の“等级” という概念で使われる場合もある。例えば胡裕树氏は文成分分析法の分ける主要成分—主語・述語と連帯成分—定語・状語・賓語・補語は同じ“等级” にはないとした上で、賓語を主語や述語と同列に扱うことを賓語を“升级” させると言う。^[3]

この賓語の“升级” については、文成分分析法における主要成分（主干）の規定の問題——主と述のみを認める立場に対し、主・述・賓を認める立場がある——が大きく関連している。

同様に、主要成分と連帯成分との関連で“级” の概念を使っているものに、傅雨贤氏の「谈谈汉语几种句式的转换」がある。^[4]

从句子平面的成分层次上看，可以分为两类：同级转换和异级转换。同级转换就是主干成分与主干成分之间的转换或附加成分与附加成分之间的转换，又可称为对转；异级转换是主干成分与附加成分之间的转换，又可称为旁转。

つまり、

我是李亚清——李亚清是我

她睡在床上——她在床上睡のような入れかえを“同级转换”^[15]といい、

狂风吹开了大门——大门被狂风吹开了

墙上挂着水彩画——水彩画挂在墙上

のような入れかえを“异级转换”と呼ぶのである。

一方，“平面”や“层次”にも，“语音级”や“句法级”に相当する使われ方があって、例えば、

主语和谓语发生关系，这是一个语法平面（句子平面），而施事、受事则是就句中名词词和动词的关系说的，这是另一个语法平面（短语平面）。

李临定「主语的语法地位」

停顿是一种语音现象，或许是语音层次的标志，但是它跟语法层次並無直接联系。它只是出现在某两个成分之间，並不一定按照语法上的组合出现在两个直接成分之间。

范继淹「汉语语法结构的层次分析问题」^[16]

のようなものが見られる。

更に，“层次”について言えば、これにも文の成分と結びつける考え方があり、

大家应该了解，句成分分析法不但有层次，而且也能保持住句子的格局。为什么句成分分析法能做到这一步呢？因为句成分分析法一共只有六个成分，这六个成分自然分为三个层次，即主、谓是一个层次，宾、补是一个层次，定、状是一个层次。

史存直「句子结构和结构主义的句子分析」^[17]

或いは又、

句子的表达层次可分基本层次和连带层次两种。基本层次是表达句子的基本意思的。一个句子的基本意思通常是由主语、谓语、宾语构成的，所以主语、谓语和宾语是句子的基本层次，也就是基本成分。

唐启运「句子成分论析」^[18]

のように、成分と层次の概念を同一の意味で使っているのも見られるが、“层次分析法”という名がある通り、文の構造を段階的に分析して行く場合のそれぞれの段階という意味で使われているのが大方のようである。^[19]そして、それは“同形异构”を明らかにする為の“结构层次”の概念として大いに使わ

れてもいえると言えよう。²⁰⁾

- 注(1) 本稿は、1985年11月9日中国語学会全国大会（於大東文化大学）において、「主語をめぐる問題」として発表したものの一部に加筆したものである。
- (2) 「重读吕叔湘先生的《主語賓語の分別談国語句子的分析》」『語文論丛2』1983 上海教育出版社所収
- (3) 叙事文について、文に対しては主一謂、動詞をめぐる起一止の二つの異なる視点を認める。
- (4) 「汉语の主語賓語問題」中華書局1956
- (5) 「汉语知識」人民教育出版社 p. 149
- (6) 「对“暫拟汉语教學語法系統”的一些意見」『汉语析句方法討論集』上海教育出版社1984所収
- (7) 「两种析句方法試評」『汉语析句方法討論集』所収
- (8) ここでの重層性とは、基本的に、北原保雄「日本語の文法」（中央公論社「日本語の世界6」1981）第三章に表わされた考え方に依拠している。
- (9) 文の構造分析のレベルについては、池上嘉彦「意味論」（大修館書店1975）第七章を参照。
- (10) 例えば日本語の基本構造については、佐伯哲夫「現代文における語順の傾向——いわゆる補語のばあい」1960（『言語生活』No.111）や宮島達夫「カカリの位置」1962（『計量国語学』No.23）等の研究により、位格（トキ→トコロ）→主格→与格→対格 時→所→主体→様子、対象→結果 といった順序で表わされるということが指摘されている。中国語にもこのような意味での基本構造を考えることは可能であると考え、従ってここでは、賓語の位置の移動ということだけではなしに、広く中国語における基本構造、文の展開の仕方というものを指している。
- (11) 田小琳『語言和語言教學』山東教育出版社1984
- (12) 『中国語文』1981、第3期
- (13) 胡裕樹主編「現代汉语使用說明」上海教育出版社1979、但、この“等級”は層次分析法での“層次”とは異なると言う。
- (14) 『語法研究和探索2』北京大学出版社1984
- (15) ここで言う主干成分どうしの入れかえとは、即ち主語と賓語の入れかえである。
- (16) 『語法研究和探索1』北京大学出版社1983
- (17) 『中国語文』1981、第2期
- (18) 上海教育出版社1980、第一章
- (19) 朱德熙「現代汉语語法研究」商務印書館1980、田小琳（1984）
- (20) 朱德熙「漢語句法里的歧義現象」『中国語文』1980、第2期 范繼淹 徐志敏
「关于汉语理解的若干句法、语义问题」『中国語文』1981、第1期